

2024年度成人科テキスト

月刊 「ぶどうの木」

12月号



その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。(ルカ1:32)

名前

目次

証し「杖と鞭」	遠坂 慎兄	・・・ 2
解説・マタイによる福音書①		・・・ 3
第35課「聖霊によって」		・・・ 5
ショートメッセージ：田中由記子姉	聖書日課：工藤征治兄	
第36課「その名はインマヌエル」		・・・ 9
ショートメッセージ：郷健人兄	聖書日課：宇佐美典子姉	
第37課「どこにおられますか」		・・・ 13
ショートメッセージ：栗山義重兄	聖書日課：渡部和子姉	
第38課「神の導きと派遣」		・・・ 17
ショートメッセージ：郷秀男兄	聖書日課：小沢敬一兄	
第39課「悲しみの中に」		・・・ 21
ショートメッセージ：田中由記子姉	聖書日課：工藤征治兄	

表紙イラスト：友納聖子姉

おしらせ

- 成人科は毎週日曜日 10：15～50 地下フェロシップホールにて行っています。ぜひご出席ください。
- ショートメッセージの動画は、教会ホームページからも視聴できます。上部メニューから「教会学校」をクリック→「成人科」をクリック
- ショートメッセージと聖書日課を、メールで受け取ることができます。ご希望の方は成人科奉仕者（ショートメッセージ、聖書日課の執筆者）にお声がけください。
- 「ぶどうの木」のボックスへの配布をご希望される方も、奉仕者までお知らせください。

すばらしい Holy Night

詞/曲 若林栄子

♩ = 112

D Gmaj7 F#m7 Bm7 Em7 G/A D

1. よ ぞらに か が や く てん の つか い た ち が
2. ち せいさな か ま ご や か い ば おけ の な か で

D Gmaj7 F#m7 Bm7 Em7 G/A D

ひ つじか い た ち に し ら せ た よ ろ こ ー び
し ずか に ね むっ て い る す く せ い た め し ェ ス さ ま

D Gmaj7 F#m7 Bm7 Em7 G/A D

ま ち の ぞ ん で い た い の り つ づ け て き た
て あ り が と う か み さ が ま あ い す る か ら あ り が と う

D Gmaj7 F#m7 Bm7 Em7 G/A D

す く い ぬ し が き よ う お う ま れ に な く 一 つ た ひ つじ
す ひ と の つ し の た め に こ の ま よ に お く ら れ た ひ つじ
わ た し た ち の た め に イ エ ス さ ま を あ り が と う わ た ー

G A/G F#m7 Bm7 Em7 G/A D

か い た ち の よ ろ こ び は う た と か わ 一 つ て ほ し ぞ
か し た ち の よ ろ こ び は う た と か わ 一 つ て ほ ほ し ぞ
か し た ー ち の よ ろ こ び は う た と か わ 一 つ て ほ ほ し ぞ

G A/G F#m7 Bm7 Em7 G/A D

ら の し た に ひ び く よ す ぼ ら し い Ho - ly - Night
ら の し た に ひ び く よ す ぼ ら し い Ho - ly - Night →
ら の し た に ひ び く よ す ぼ ら し い Ho - ly - Night → (♩に戻る)

証し「杖と鞭」

遠坂 慎

成人科は私の大好きな交わりの一つです。まだ1歳のクリスチャン、よちよち歩きの私にとって、大先輩のみなさんと交わりの機会を持つことができる成人科は、いつも新たな気付きと、今まで気に掛けることがなかった何気ない聖書の言葉を、掘り下げて調べる貴重な機会となっています。

事前に次回の内容を確認して、予習をするのが成人科に参加させていただく前の楽しみになっていますが、読み進めている間に、その分かち合いのヒントを与えられることもあれば、読み終わって、何度読み返しても、そして日曜日になっても分かち合うことを何も思いつかないこともあります。また、順調に準備が進み、どんなことを分かち合うか、全て整っていたとしても、冒頭のビデオを見ている間に「ふっと」テキストの行間から疑問が湧き出てきたり、分かち合いが始まり、同じグループの方のお話を伺っている間に、全く別の考えが頭に浮かんだりして、時間をかけて準備したアイデアが実際に使われることが無いこともよくあります。その様な時には「神の臨在」を感じることがあります。そしてどんなに時間を費やして考えを重ねても、「聖霊の囁き」一つで簡単に覆ってしまうのだなと気づかされます。

これからも積極的に成人科の学びと分かち合いに参加させていただき、聖書の理解を深め、信仰を強くし、キリストの香りを身にまとえる様になりたいと思います。

Even though I walk through the darkest valley, I fear no evil; for you are with me;
your rod and your staff – they comfort me. PSALM 23:4 (NRSV)



解説・マタイによる福音書①

【中間の時代】

旧約聖書は前430年頃、預言者マラキをもって終わっています。イエス・キリストの誕生までの約400年間の間は「神の沈黙」の期間として預言者が神の言葉を語ることはありませんでした。しかし、預言者ダニエルが預言したとおりの世界情勢の変化(ペルシャ、アレクサンドロス大王の支配とその後)を通して、神はイエスさまの到来を準備しておられたのです。

【ペルシャの時代 前430～前332年】

ユダヤは広大なペルシャ帝国のなかで狭い片田舎の属州として支配下にありました。統治は穏やかで寛大でユダヤの民にとっては良い時代と言えました。彼らの信仰が復興してきた時代でもありました。

ペルシャはキュロス王から11代続き、ダリヨス三世が最後の王で、これを打ち破ったのはマケドニアのアレクサンドロスでした。

【ギリシヤの時代・アレクサンドロス大王の東征 前336～前323年】

アレクサンドロスはユダヤを敵視せずに支配下に治めたので彼らも歓迎しました。アレクサンドロスは西はギリシヤから東はインドまで広がる一大帝国を築きあげました。進展に伴ってヘレニズム政策を行ってギリシヤ人を移住させていきました。ユダヤ人もこの時代に広範囲に移動、入植が自主的におこなわれるようになります。世界は東西交流が活発となりヘレニズム運動の結果、ギリシヤ語が当時の世界共通語となっていきました。これはキリスト教のメッセージを伝えることに多いに役立ちました。

【七十人訳聖書(セプトゥアギンタ) 前3世紀から前1世紀】

ユダヤ人も離散(ディアスポラ)を続け、ほとんどのユダヤ人がヘブル語を話せなくなりました。パレスチナの共通言語はアラム語となりイエス様もアラム語で話されていました。ヘブル語で書かれた旧約聖書は新しい世界語となったギリシヤ語に北アフリカのアレキサンドリアで72人の学者により翻訳されました。72人が72日でモーセ五書(創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記)を翻訳したと伝えられて七十人訳聖書と呼ばれています。この聖書で現在の書巻の順番に並べられました。

【プトレマイオス朝とセレウコス朝 前323年～前168年】

アレクサンドロス大王は前323年にバビロンで病のために急逝しました。帝国は四人の将軍が統治することになりましたが当然に領地争いが起こり、前301年から前198年までエジプトを支配したプトレマイオス朝がユダヤも支配しました。ユダヤはエジプトに属して平和に過ごしました。この時代はエジプトのアレキサンドリアがユダヤ勢力の中心地となりました。

前198年シリアを支配していたセレウコス朝のアンティオコス大王(3世)がパレスチナを征服し、当初はユダヤ人に寛容な政策でしたがアンティオコス4世に代わると反ユダヤ教となり、神殿を破壊し礼拝を禁じ、割礼も禁じました。

【ユダヤ人のハスモン朝の誕生 前168年～前37年】

こうした宗教的弾圧にユダヤの民は前167年祭司マカベアの指揮のもとにマカベアの反乱を起こし、ユダヤ人は独立を果たします。ユダヤ人のハスモン朝は前168年～前37年まで続きました。ハスモン朝の指導者はダビデの家系ではなかったので「王」と名乗らず「指導者・大祭司」と呼ばれました。独立戦争は長く続き前128年にようやく独立を果たします。さらにセレウコス朝の力が衰えてエルサレムを中心とした地域から次第に領土を拡大していきます。ガリラヤ、サマリヤ、イドマヤを併合していきます。指導者は9代続きましたが、いずれも暴君で腐敗した政治のなかで前63年にローマ帝国に征服されてハスモン朝はローマの傀儡となりユダヤはローマの属州となったのです。

【ローマの支配 前63年～後636年 ヘロデの支配 前31年～前4年】

ローマの属州となったユダヤ(ハスモン朝)はローマ帝国が権力闘争により分裂した混乱に乗じてイドマヤ人のヘロデー族がハスモン朝を倒します。ユダヤの実権を握り、その後ヘロデ大王は30年にわたりユダヤを治めました。ヘロデ大王は第2神殿のあった丘にハスモン朝時代に増築された神殿を、さらに壮麗に前10年までに建て上げました。そして、イエス様の時代を迎えます。

【当時の言語 アラム語とギリシヤ語】

捕囚時代後のパレスチナの共通言語はヘブル語からアラム語となっていました。アレクサンドロス大王以前の何世紀かの間、商業・外交の言語でした。

イエス様はヘブル語を読むことも話すこともお出来になられましたが、普段はアラム語で話をされた可能性が高いのです。

アレクサンドロス大王の東征による帝国の拡大は同時にギリシヤ語とヘレニズム文化を浸透させていきました。ローマ帝国ではギリシヤ語を共通言語として今日の英語と同様な役割を果たしました。

使徒たちはギリシヤ語で手紙を書きました。

【ディアスポラ・離散】

ユダヤ人は北イスラエルと南ユダの捕囚により離散しました。捕囚からの解放後もユダヤに戻らなかった人たちも多くいたのです。

さらに、アレクサンドロス大王が多くのユダヤ人にエジプトのアレキサンドリアに移住するように促し、また、帝国の拡大に伴って商業の交流のために近隣諸国へ自由に移り住む人も増えました。

恐らくはパレスチナ内に住むユダヤ人の何倍もの人たちが近隣・周辺諸国に移り住みディアスポラの民となっていきました。

マタイは福音書を最初にアラム語で書き、後にギリシヤ語に翻訳したと考えられています。

参考図書

「新約聖書概論」 2002年 日本ホーリネス教団

「バイブルガイド」マイク・ボーマント 2015年 いのちのことば社

「バイブルワールド」ニック・ペイジ 2016年 いのちのことば社

「新聖書ハンドブック」ヘンリー・H・ハーレイ 2023年 いのちのことば社

(文責・郷秀男)

第35課 聖霊によって

聖書箇所：マタイによる福音書1章18－21節（参照1章1－17節）

主題聖句：ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。

マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。（20節）

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

12月になりました。アドベントを迎えています。

今月から来年の4月まで、5か月かけてマタイによる福音書を学びます。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ…4つの福音書のうち、イエスさまのご降誕について書かれているのはマタイによる福音書とルカによる福音書のみです。

ルカによる福音書では、「イエスはヨセフの子と思われていた（ルカ3:23）。」と書かれており、そこから遡って男性のみの系図が書かれています。それに対し、マタイによる福音書に書かれている系図には、女性の名前もあり、「マリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった（マタイ1:16）。」と書かれています。また、ルカによる福音書では、マリアに天使が現れますが、マタイによる福音書ではヨセフに天使が現れます。

このような違いはありますが、ルカによる福音書では「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。」（1:35）、マタイによる福音書では「聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。」（1:18）と書かれているように、どちらの福音書でも、マリアが“聖霊によって”イエスさまを身ごもったことが記されています。

1章の1節から17節には、アブラハムからイエスさままでの系図が書かれています。それに続く18節は新共同訳では、「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。」と訳されていますが、原文では、冒頭に「しかし」や「ところで」と訳される接続詞があります。つまり、アブラハムからヨセフまでは、通常の人間の誕生であったのですが、イエスさまのお誕生はそうではなかったということです。

一緒になる前にマリアの懐妊を知ったヨセフの心中はいかばかりであったでしょう。驚きやショック、憤りなどという簡単な言葉では言い表せないものであったことを想像します。

しかし、「ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」と聖書は語ります。律法を破ることはしませんが、律法を振りかざして、マリアを責め立てることも望みませんでした。マリアにとって、一番良い方法を選び取るうとしたのです。悩んで、苦しんで出した答えであったことでしょう。

そのヨセフに対して、神さまは、恐れずマリアを受け入れるよう告げます。

しかし、聖霊によって身ごもるなど、簡単に受け入れられるものではありません。聖書にはヨセフの言葉は一言も書かれていないので、どのような葛藤があったのか、想像することしかできませんが、ひたすら祈って、神さまのみ言葉を求めたのではないのでしょうか。

聖霊による神のみ子の誕生を信じられないのは、当時の人たちだけではなく、現代に生きる人々の中にも、「聖霊によって身ごもるなどあり得ない」「作り話ではないか」と思う方も少なからずいらっしゃいます。

しかし、神さまのなさることで、私たちに理解できることはごくわずかです。全人類を罪から救うために、神さまはひとり子をこの世にお遣わしになりました。一人の人間が何かの力を得て救い主になったのではなく、神さまの子を救い主としてこの世に生まれさせてくださったのです。これらのことは全て神さまの大いなるみ業です。聖霊の働きです。人間の力や行為ではありません。神さまの驚くべき恵みの計画に必要な、このイエス・キリストの誕生に感謝して、アドベントを過ごし、クリスマスを迎える心の準備をしまりましょう。

～分かち合い～

- イエスさまのお誕生が遠い昔の出来事ではなく、我が事として感じられるのはどのような時ですか？
- 「聖霊による身ごもり」という神さまの御業について、感じていること、考えたこと、誰かに伝えたいと思うことなどについて、分かち合ってみましょう。

今週の聖書日課

1 2月2日 (月) マルコによる福音書 14章8節

この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。

私がクリスチャンになる前の「正しい、正しくない」の判断基準は、法律的に罪を犯しているか否かでした。クリスチャンになってから、法律的な罪の他に、心の罪を知り、その基準は聖書にある事を知りました。道德教育が廃れた日本社会には、心の罪の概念は殆どありません。

1 2月3日 (火) ローマの信徒への手紙 5章5節

希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

クリスチャンとして未熟な私は、「聖霊」とは何かを考えます。例えば聖書を学んでいる時、心がジーンとする時の震え、又日常生活の中で感動した時の心の震えかなとも思っています。

1 2月4日 (水) 詩編 139編 16節

胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。
わたしの日々はあなたの書にすべて記されている
まだその一日も造られないうちから。

動物であれ植物であれ、生命現象は不思議で、考えれば考える程、生きている事は感動的で、その上誰1人として、人の死期を予測出来ない不思議を感じます。

1 2月5日 (木) イザヤ書 7章 14節

それゆえ、わたしの主が御自ら
あなたたちにしるしを与えられる。
見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み
その名をインマヌエルと呼ぶ。

アハズ王は南ユダ王国第12代(BC740年頃)の王で、預言者イザヤ時代の最悪の王と言われ、南ユダ王国は危機的状況に陥ったと伝えられています。アハズ王の20年後には、北イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされています。イザヤは国を一つに纏められないアハズ王に絶望した事でしょう。

1 2月6日 (金) イザヤ書41章10節

恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。
たじろぐな、わたしはあなたの神。
勢いを与えてあなたを助け
わたしの救いの右の手であなたを支える。

イザヤの時代にはアッシリアやバビロン等近隣大国の圧力に対し、イザヤは神の語られる「わたしはあなたと共にいる神、たじろぐな....」と南ユダ王国のユダヤ人達を力づけています。

1 2月7日 (土) ヘブライの人への手紙13章5節

金銭に執着しない生活をし、今持っているもので満足しなさい。神御自身、「わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りににはしない」と言われました。

「わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りににはしない」と神さまは語られる。神は、地球上の生命を含め、全宇宙を創られた。科学技術がどんなに進歩しても、この精密な生命機能を作る事は出来ません。だから人間は創られた神といつも一緒です。



第36課 その名はインマヌエル

聖書箇所：マタイによる福音書1章22-25節

主題聖句：この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。（23節）

22このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

23「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。24ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、25男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

アドベントの第2週を迎えました。毎週火が灯されていくアドベントクランツは、1本目から順に「光」「希望」「愛」「救い」を表しています。今週の箇所は、2本目の「希望」に思いを馳せる上でも、ぴったりの箇所ではないでしょうか。

マリアやヨセフが受けた不思議なお告げは、人間の常識や理解を大きく超えたものでした。2人が感じたであろう戸惑いや不安も、私たちの想像を超えるものであったはずです。しかし、それらを乗り越えて神さまのお告げに真っ直ぐ従ったマリアとヨセフの姿にこそ、私たちは倣っていきたくと願います。イエスさまのお誕生に関しては、「実はこういう経緯だったのでは」と、人間の常識や理解力に収まる内容で推測する方が、現代でもいるようです。しかし、私たちが心を向けるべきなのは聖書に書かれた神さまの御言葉のみです。どんなに不思議な出来事であっても「神に出来ないことはない」という信仰に立って、そのままに受け止めるべきではないでしょうか。

さて、マタイ福音書が主な読者として想定したユダヤ人たちにとっては、イエスさまのお誕生の経緯もさることながら、それが過去の預言と一致することがとても大切でした。22節のような箇所が、福音書の中では何度か繰り返されます。23節で引用されている預言はイザヤ書のものですが、11月に学んだ通りエレミヤ書でも繰り返し救い主の存在が預言されています。民全体が大きな不安を抱えた状態で預言を受けていましたから、当時の人々は政治的、軍事的な意味での強力なパワーを持ったリーダーを想起していたかもしれません。少なくとも、家畜小屋で隠れるようにお生まれになるとは誰一人考えもしなかったでしょう。

では預言者たちの預言は間違っていたのでしょうか？

決してそうではなく、政治的にも軍事的にも全く力を持たず、弱い人々の真ん中に立って歩み続けられたイエスさまを通してこそ、神さまの「私はあなた方と共にいますよ」というインマヌエルのメッセージが伝わってくるのです。ユダヤに限らず様々な国や民族の歴史には、優れた為政者や、勝利を納め続けた将軍らの名が刻まれているでしょう。その誰をもってしても、「インマヌエル」を表すことは出来ないのです。

「名」に関して言えば、「イエス」という名は必ずしも珍しいものではなかったようです。ヘブライ語の「ヨシュア」に由来しており、「主は救う」という意味を持った名です。福音書の中でも「ナザレのイエス」「ヨハネの子イエス」といった呼称が使われており、他のイエスさんがいたからこそ地名等で区別されていたとも考えられます。

私は子どものころから、この「イエスという名はそれほど珍しくない」という点が、イエスさまをより身近に、親しみをもって感じる支えとなっていました。唯一無二のお方でありながら、あえて当時の人々にも馴染みやすい名前を付ける。ここにもまた、神さまの「インマヌエル」の思いが感じられます。

私たちの生活の様々な場面でも、ああ確かに神さまが共にいてくださったと感じる出来事が備えられていることと思います。アドベントのひと時、心静かに皆様とインマヌエルの主に思いを馳せることができましたら幸いです。

～分かち合い～

- イエスさまがお生まれになったことで、私たちにはどのような「希望」が与えられたのでしょうか。
- 日常生活や、これまでの歩みの中で、神さまが共にいて下さったと感じた出来事を分かち合いましょう。

● 今週の聖書日課 ●

1 2月9日 (月) ヘブライ人への手紙2章18節

事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。

NBAの選手やアメリカのミュージシャンが「WWJD」と書かれたブレスレットを着けているのをよく見かけます。What Would Jesus Do? キリストならどうするのだろうか? という意味ですが、世界で活躍する有名な人たちでも、悩み のときや困ったときには、まずイエスさまに心を向けて祈っていることがわかります。大きな犠牲と苦しみを乗り越えられた方だからこそ、私たちに必要なアドバイスを下されると信じます。

1 2月10日 (火) ヨハネによる福音書16章21節

女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。

イエスさまは弟子たちの悲しみが喜びに変わることを宣言されました(20節)。ひとつの例えとして産婦の産みの苦しみと誕生の喜びを示し、苦痛だけが問題視されるべきではなく、大きな喜びによってこの苦しみは忘れられるのだと教えておられます。

1 2月11日 (水) ダニエル書12章3節

目覚めた人々は大空の光のように輝き
多くの者の救いとなった人々は
とこしえに星と輝く。

夜空を彩る華やかな花火は人々を楽しませてくれます。しかしその花火が終わったあと、いつもと変わらない静かな星の輝く空となります。私たちキリスト者の輝きはこの世においては、かき消されてしまうほどの小さな光かもしれませんが、世の輝きが過ぎ去ったあと、いつまでも輝き続けるのはキリストの栄光の光です。

1 2月12日 (木) マタイによる福音書28章20節

あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

「もっともひどい貧しさとは孤独であり、誰からも愛されていないこと」とマザーテレサは言いました。誰かと共にいるということは、人間の根本的な望みです。イエスさまは私たちと共にいることを望まれています。遠い存在でなく私たちのそばにいるよ（インマヌエル）、といつも言ってくださいます。感謝します。

1 2月13日 (金) マタイによる福音書2章6節

『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。
お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

神さまは小さいものを大きく用いられます。救い主も小さな町ベツレヘムで貧しい両親から誕生しました。神の国は「からし種」の原則で成長していきます。自分の小ささを悲観したり隠したりしなくていいのです。

1 2月14日 (土) 創世記15章5節

主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

神さまがアブラムを大いに祝福されました。創世記12：6では「大地の砂粒」、22：17では「海辺の砂」のように数えきれないほど子孫が繁栄すると約束されました。そしてその子孫の中から救い主がお生まれになるのです。



第37課 どこにおられますか

聖書箇所：マタイによる福音書2章1－8節

主題聖句：そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、
星の現れた時期を確かめた。(7節)

1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

6 『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。
お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

7 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8 そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。

この箇所は「3人の博士」、「東方の三賢者（三賢人）」と呼ばれている有名な聖句です。占星術は古代バビロニアの天体観測を起源としていたので当時のバビロン辺りから来たと考えられているようですが詳細は分からないそうです。「東方」ですのでユーラシア大陸の東にある日本も候補には入りそうですが、距離があり過ぎますし、紀元前の終わり頃の日本に占星術の学者は居そうにないですね。弥生時代（紀元前300年～紀元後250年）の真ん中辺り、稲作が定着して農耕民族になった頃の出来事です。

2節、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」という言い方ですと、「自分の王の座を奪う者」と捉え、ヘロデ王は不安を抱いたのでしょう。「エルサレムの人々も皆、同様であった」とはどういうことでしょうか。ヘロデ王は王族の出身ではなくローマ元老院によって「ユダヤの王」として立てられた王でした。ローマの属国となっていたユダヤを統括しやすいように王として配置された者と言えます。そのため猜疑心が強く、身内も含む多くの者を殺害していた王と云われていました。ですので、エルサレムの人々は「王の耳にこんな話が伝わってしまうと、また多くの者の命が奪われるのではないか」という不安が生じたのではないのでしょうか。

また、4節で「メシアはどこに生まれることになっているのか」というヘロデ王の言葉は、「(王が生まれたことを示す) 星が現われるほどの王とは神さまが予言されているメシアに違いない」と考えての言葉であり、祭司長や律法学者たちもこのタイミングで集められ、その可能性を感じつつ回答をしました。その後、ヘロデ王は占星術の学者たちを「ひそかに」呼び寄せ、

どこで生まれたのかを個人的に教えて欲しいと頼みます。祭司長や律法学者も含むエルサレムの人々がずっと待ち望んでいた「メシアの誕生」の知らせ。この知らせが皆に受け入れられてしまったら自分の地位など簡単に奪われてしまいますし、下手に動くとも祭司長や律法学者を敵に回しかねない状況でもあったので、「ひそかに」動く必要があったのでしょうか。そして占星術の学者たちを預言で示されている町、ベツレヘムへ送ります。

もし、占星術の学者たちが「あなた方が待ち望んでいたメシアとしてお生まれになった方は、どこにおられますか。」と直接に言っていたらエルサレムの人々に大きな喜びが生まれ、「皆で拝みに行こう」となったかもしれません。「ユダヤの王としてお生まれになった方とは私たちが待ち望んでいるメシアかもしれない」と考えていたエルサレムの人々もいたと思いますが、「この王の時代にメシアが誕生しても…」という不安の方が大きかったのではないのでしょうか。「そしてその不安は…、何故ヘロデ王は『星の現れた時期を確かめた』のか…」という所で今週はおしまいです。今月は毎週の聖句が繋がっておりますので、クリスマスの日めくりカレンダー（アドベントカレンダー）のように楽しんで読んで（聞いて）いきましょう。

最後に、「祭司長たちや律法学者たち」がヘロデ王の「メシアはどこで生まれることになっているのか」の問いに答えた6節の聖句は「ミカ書5章1節」の預言の言葉です。続くミカ書5章3-4節にこうあります。

「彼は立って群れを養う
主の力、神である主の名の威光をもって。
彼らは安らかに住まう。
今や、彼は大いなる者となり
その力が地の果てに及ぶからだ。
彼こそ、まさしく平和である。」

イエスさまの誕生をお祝いしましょう！

～分かち合い～

- 暗闇の中の希望の光。希望を待ち望んでいた筈なのに暗闇に慣れ過ぎてしまい、希望を素直に受け入れられない思いになったことはありますでしょうか。

● 今週の聖書日課 ●

12月16日(月) 箴言29章4節

王が正しい裁きによって国を安定させても
貢ぎ物を取り立てる者がこれを滅ぼす。

国の王様が正しい導きで国を安定させようとしても、連なる為政者や経営者が不正や自分の利益ばかりを考えていたら国民の幸せは無くなります。「弱く貧しい者にも、正しく忠実な裁きをできる王様、為政者、経営者、リーダー」を私たちは心から願ってお祈りいたします。

12月17日(火) フィリピの信徒への手紙2章7節(前半)

かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。

イエスさまは神さまの身分であられたのに、神さまと等しい者であることに固執しようとは思わず(8節)、私たちの救いのためにご自分を無にして、僕の身分になり人間と同じようになられました。私たちの常識では考えられない犠牲を払ってご自分をお捧げくださいました。この大きな愛の中に生かされていることを知ることを許された私たちは、主の前にいつも感謝を持って歩む者でありたいです。

12月18日(水) ヨハネの黙示録21章24節

諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。

新しいエルサレムでは、諸国の民は都の光の中を歩みます。ユダヤ人と異邦人の区別もありません。救われた全ての人々は神さまの光り輝く栄光の中を歩みます。(イザヤ60:3)全地の王(支配者)たちも、王の王であり真の支配者神さまの栄光を崇めます。

1 2月19日 (木) 詩編14 | 編2節

わたしの祈りを御前に立ち昇る香りとし
高く上げた手を
夕べの供え物としてお受けください。

主は、旧約でイスラエルの民が乳香を燃やした香りを受け入れてくださったように、私たちが苦しい時も嬉しい時も悲しい時も喜びの時にも、呻き訴えるようなお祈りも囁くようなお祈りも、喜んで受け入れてくださり「聴いているよ、知っているよ。いつも共にいるから大丈夫だよ。」と、教え励ましてくださることを感謝いたします。

1 2月20日 (金) 出エジプト記13章21-22節

21主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。 22昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった。

主は、出エジプトでイスラエルの民が荒野を進む時にこのように導き守られました。現代も紛争や戦争、差別、貧困などで荒野を歩まれておられる方々が大勢おられます。例えそうで無くても災害、虐めなど荒野を歩まなければならない時があります。又この世には私たちを惑わすものが沢山あります。主よどうぞ私たち一人一人を雲の柱火の柱で力強く導きお守りくださいますようお願いいたします。

1 2月21日 (土) イザヤ書55章12節

あなたたちは喜び祝いながら出で立ち
平和のうちに導かれて行く。
山と丘はあなたたちを迎え
歓声をあげて喜び歌い
野の木々も、手をたたく。

神さまの言葉が語られると、その人の中で生きて働いてその人を変えてくださる。それがどんなに素晴らしいもので、私たちにも約束されているものであることが書かれています。神さまの言葉が撒かれるとその人は喜びを持って出ていくようになります。安らかに導かれていきます。人間が罪赦されると自然界も共に喜んでくれるのですね。

第38課 神の導きと派遣

聖書箇所：マタイによる福音書2章9－12節

主題聖句：東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。(9節)

9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

今週の聖書教育誌の週題は「神の導きと派遣」です。

2:9 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。

私たちの教会ではクリスマス祝会に毎年、子どもたちによる降誕劇が行われていてとても楽しみにしています。劇のクライマックスは東方の三博士(占星術の学者)の登場です。聖歌隊の賛美に導かれて博士が一人ひとり「黄金」「乳香」「没薬」をお生まれになったイエス様のひざ元に置いて礼拝する場面はいつも感動を覚えます。

救い主の誕生を祝うために、はるばる東方から夜空に輝く大きな星に導かれて旅をしてきた占星術の学者は三人だけで来たわけではありません。大勢の従者も従えて星をたよりに夜の道を進む旅でした。それは大変な苦労もあったことでしょう。星に導かれてとは「神に導かれて」と理解できます。目的地も、どれくらいの旅路となるのかも、拝する相手もわからない旅でした。ようやくユダヤの地に辿り着き、ヘロデ王に謁見して、その場所がユダヤのベツレヘムだと示されます。

果たして、夜空に輝く大きな星はその言葉とおりにベツレヘムの幼子のいる場所の上でついに止まりました。

2:10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。

この学者たちの旅路は、私たちの人生の旅路とも重なります。先行きの見えない不確かな人生は夜の闇の中を歩くようなものです。なにかを頼りにして、ひたすら前に進んでいく、進むべき道を探しながら人生の旅路を歩んでいます。私たちは時として後を振り返り、周りを見渡して前を目指します。学者たちとの違いは星を見る・天を仰ぐことを知らない人生の旅路です。けれども私にも迷い不安になったりした時に無意識に天上を見上げて思わずため息をつくようなことが何度もありました。立ち止まり、天を見上げ、夜空にまたたく星々を見つめるときに、これまでの考えとは違う道が示されたこともありました。それは神が語りかけてくださったことだと今は感謝して言うことができます。

詩篇8:4~5

あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。

三人の学者はそれぞれに「黄金」「乳香」「没薬」という当時としては大変に高価で、生活にも宗教儀式においても欠かせないものを捧げてひれ伏して拝しました。「黄金」は王権を、「乳香」は神性を、「没薬」は「救い主(死と受難)」を表しているとされています。誕生された神の御子イエスさまが歩まれるであろう「地上の旅」を暗示しているかのようです。彼らの旅路は決して物見遊山の旅ではなくて彼らの永い間、求めていた「真の王・主なる神」に出会うための旅でした。それは「真の救い主」と共に歩む人生が始まることを意味します。これまでの暗闇の中を歩む人生ではなくて、暗闇から解放された新しい人生を始めるための旅となることを確信してのことでした。

現代の教会暦では1月6日を公現日(エピファニー)としてあり、それは東方の三博士(占星術の学者)が幼子イエスさまを礼拝した日とされています。

2:12 「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

イエスさまを礼拝した学者たちはヘロデ王の許には戻らずに自分たちの国に帰って行きました。伝承によれば彼らは後にキリスト者となり福音を世界に広めたとされています。ドイツのケルン大聖堂には、彼らの遺骨(であるとされる)を納めた棺が安置されています。

クリスマスおめでとうございます。

夜空に輝く星を探し訪ねた学者たちの旅は終わりました。学者たちが天を仰ぎ、神の導きに従ったように、私たちも夜空を見あげ、暗闇の中の希望の光、イエス・キリストにより生かされている幸いを覚えたいと思います。それは、三人の学者たちと同じように新たに福音を携えて歩みだすこと、福音の証し人として世に派遣されることでもあります。

クリスマスのとき、これまでの人生の歩みを振り返り、これからもまた主に信頼して歩み続けたいとの思いを強く与えられて感謝しています。

～分かち合い～

- 2000年前のキリストの誕生を今も祝うことで私たちが大切にしていることを分かち合ってみましょう。

● 今週の聖書日課 ●

1 2月23日 (月) マタイによる福音書2章10節

学者たちはその星を見て喜びにあふれた。

星が導いてくださる。主がわたしたちを導いてくださる。なんと心強い事でしょう。「学者たちはその星を見て喜びにあふれた」

1 2月24日 (火) マタイによる福音書2章11節

家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

主に導かれて、遠方より旅をして、ついにめぐり会えた。ついに……。彼らはひれ伏して幼子を拝んだ。宝の箱を開けて贈り物を献げた。神さま、ありがとうございます。

1 2月25日 (水) エレミヤ書6章16節

主はこう言われる。

「さまざまな道に立って、眺めよ。

昔からの道に問いかけてみよ

どれが、幸いに至る道か、と。

その道を歩み、魂に安らぎを得よ。」

しかし、彼らは言った。

「そこを歩むことをしない」と。

問いかけてみよ。どれが幸いに至る道か、と。わたしをイエスさまの道へと導いてくださいました神さま、ありがとうございます。今日はクリスマスです。イエスさまのご降誕を心からお祝い申し上げます。

1 2月26日 (木) ヨハネによる福音書1章5節

光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

イエスさまは暗闇の中で輝いています。そして「互いに愛し合いなさい」と言われます。暗闇はイエスさまを、イエスさまの言葉を理解しなかった。イエスさまの「愛」がひろまり、世界が平和になりますように。

12月27日(金) ホセア書11章1節

まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。
エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。

主はわたしたちを愛してくださっています。でも、目先のことしか考えず、主が造られたこの美しい地球を汚しています。その公害で、地球に住む生き物だけでなく、自らも苦しめています。愚かなわたしたちですが、主は愛してくださっています。主よ、あなたの大きな愛に感謝致します。

12月28日(土) レビ記19章33-34節

33寄留者があなたの土地に共に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。
34あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である。

どんな人も皆同じです。主が必要として、愛されて生かされているのですから、差別や偏見もなく、あなたの隣人を「自分自身のように愛しなさい」主よ、イエスさま、ありがとうございます。



第39課 悲しみの中に

聖書箇所：マタイによる福音書2章13－15節（参照2章16－18節）

主題聖句：それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、
主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。（15節）

13占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」 14ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、 15ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

2024年最後の聖書教育の学びとなりました。

先週は、皆さまとクリスマスをお祝いすることができて感謝でした。

しかし、クリスマスのお話は、「私たちのために、救い主がお生まれになった！」という喜びで終わるのではありません。

占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が、再び夢の中でヨセフに大切なことを告げます。今すぐに、幼子とマリアを連れてエジプトに逃げるようにというのです。ヘロデ王がイエスさまを殺そうとしていると。

ヘロデ王はユダヤ人ではありませんでした。そのため、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。」(2:2)と占星術の学者たちに尋ねられ、自分の地位が奪われるのではないかと不安になったのです。そして、自分の地位を守るために、イエスさまを殺そうとしました。イエスさまを見つけられなかったヘロデ王は、あろうことか、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させたのです。なんという恐ろしいことでしょうか。保身のため、自分の不安を払拭するために、自分のことだけを考えて、尊い命を奪うという罪深い行為です。

それに対して、ヨセフは、自分の気持ちや考えよりも、み言葉を大切にする人でした。夜中の移動は危険を伴います。ましてや、女性と子どもを連れての旅です。夜が明けてからにしようと考えても不思議はありません。しかし、ヨセフはみ言葉に従って、夜のうちに出発したのです。

神さまのなさることは、時に、私たちの理解を超えます。私たちが愛して、私たちのためにひとり子を遣わしてくださった神さまが、なぜイエスさまの命を危険にさらすようなことをなさるのか。大勢の幼い子どもが命を奪われるという悲しい出来事がなぜ起こったのか。受け入れ難く、理解に苦しみます。しかし、これらは全て神さまの大きな計画の中で行われたことなのです。14節には、「主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」と書かれています。17節、23節にも繰り返し同様のことが書かれています。神さまならヘロデ王の残虐な行為もやめさせられたはずです。他の方法はなかったのでしょうかと問いたくなります。しかし、エレミヤ書29章11節にあるように、これらも災いではなく、平安を与える計画なのです。そして、先月もエレミヤ書で学びましたが、神さまは私たちを滅ぼすことが目的なのではなく、私たちを一人残らず救うためのご計画を立ててくださっています。ですから、エジプトに逃げるのが目的なのではなく、神さまがエジプトから呼び戻すことを約束されていることが重要です。モーセの出エジプトを思い出される方も多いのではないのでしょうか。神さまの時に、神さまに連れ戻していただくことを信じて待つことが大切なのです。

ヨセフのように、み言葉に誠実に従うものでありたいと思います。しかし、その一方で、自分はヘロデ王のような極悪非道な行いはしないと傲慢になっているところもあるのではないのでしょうか。確かに、ヘロデ王のような命令は下さないとと思いますが、社会の中で、職場や学校の中で、自分の地位や立場を奪われそうになった時、その人を排除しようとしたり、意地悪をしたり、その人の存在を不快に思ったりしたことはないのでしょうか。

「イエスさまが生まれてくださって感謝です。クリスマス、おめでとうございます！」だけでは終わらない、その裏にある、人間の罪や悲しみ、そして、全てを神さまに委ねる信仰心に思いを寄せて、今年一年の自分の歩みを振り返り、悔い改めて、神さまに立ち帰って、新しい年を迎えることができますよう、祈ってまいりましょう。

～分かち合い～

- 2024年を振り返ってみましょう。心から神さまを追い出して、自分の利益だけ考えていたことはなかったでしょうか。自分の幸せの影で、涙を流していた人がいなかったでしょうか。神さまを信じて、み言葉に耳を傾け、み言葉に従う歩みができていたでしょうか。

今週の聖書日課

12月30日(月) マタイによる福音書27章41-43節

41同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。
42「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。 43神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」

ヤコブの兄-エサウを祖とするエドム人のヘロデはユダヤ教に改宗し、ローマ帝国の後押しで、ユダヤ社会の王になり、イエス-キリストが生まれた時、「ベツレヘムとその周辺一帯にいた2才以下の男の子を1人残らず殺させた(マタイ2章16節)」。
今も昔も、倫理的に誤った統治者は人の命を何とも思わないのでしょうか。

12月31日(火) エレミヤ書31章15-17節

15主はこう言われる。

ラマで声が聞こえる

苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。

ラケルが息子たちのゆえに泣いている。

彼女は慰めを拒む

息子たちはもういないのだから。

16主はこう言われる。

泣きやむがよい。

目から涙をぬぐいなさい。

あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。

息子たちは敵の国から帰って来る。

17あなたの未来には希望がある、と主は言われる。

息子たちは自分の国に帰って来る。

「武力による紛争や侵略があると、犠牲になるのは多くの場合、幼い子供たちです」と記述がありました。今パレスチナ-ガザ地区は地獄と化しています。ハマスは病院や学校の真下に司令部や武器庫を作り、同族市民を盾にしています。時代や地域を超えて、人の命を何とも思わない人達があります。今の中東、そしてウクライナに平和が来ますように祈ります。

1月1日(水) ルカによる福音書7章13-15節

13主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。14そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。15すると、死人は起き上がったものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。

「1番の親不孝は、子供がその親より早く先立つ事」とよく言われます。今100歳時代の日本では、子供が先立つ確率は以前より高くなりつつあります。時代と社会の変化で今迄と違う人生の変化も起こります。聖書を学び、心の平安を得る事が必要です。

1月2日(木) ルカによる福音書1章13-17節

13天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。14その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。15彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、16イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。17彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」

洗礼者ヨハネはイエス-キリストに洗礼(バプテスマ)を施し、旧約から新約への道を準備した偉大な預言者です。

1月3日（金） ルカによる福音書2章41-52節

41さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。42イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。43祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。44イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、45見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。46三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。47聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。48両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」49すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」50しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。51それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。52イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。

イエスさまは30歳迄、親兄弟や家族皆の為に大工仕事をし、それから3年間、福音を告げ知らせる公生涯をおくられました。そのお働きの片鱗が、少年時代にも現れていたようです。

1月4日（土） マタイによる福音書3章1-12節

1そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、2「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。3これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。

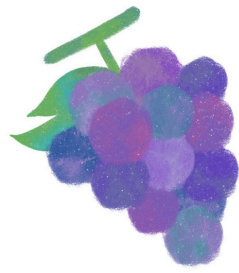
『主の道を整え、

その道筋をまっすぐにせよ。』」

4ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。5そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、6罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

7ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「虻の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。8悔い改めにふさわしい実を結べ。9『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。10斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。11わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。12そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

バプテスマのヨハネは、ヘロテ王が自分の兄弟のフィリポの妻—ヘロデアと結婚した事に対し、「自分の兄弟の妻と結婚する事は、法律で許されていません」と諫めましたがヘロデアはヨハネを恨み、殺そうとしていました。洗礼者ヨハネは、それまでと違った、心から改心/悔い改めの為の洗礼（バプテスマ）を人々に授け、イエス・キリストの到来を人々に告げる働きを担いました。



2024.12 成人科